

学校教育目標		志を持ち、自ら考え行動できる児童の育成		重点目標	自ら つなぎ つながる力の育成			
評価計画				自己評価		学校関係者評価		
重点目標	目標達成のための方策(取組指標)	成果指標	評価	結果(成果○と課題△)		コメント	改善計画	
重点目標	学力の向上	○子どもがめあてとまとめをつくる授業 ○個々の学力分析と指導計画の策定 ○授業での交流:振り返り活動の位置付け(毎時間) ○学習形態(少人数学習、T T学習等)を工夫したきめ細かな指導による授業づくり ○考えを伝え合い表現する場の設定 ○教育的配慮を要する児童への手立ての工夫 ○ユニバーサルデザインの環境整備と授業づくり ○学習のあゆみの適時適切な掲示 ○家庭学習強調旬間の実施(学期1回)による家庭との連携 ○自主学習の導入と充実	○全国学力・学習状況調査正答数(全国平均同等) ○大牟田市標準学力調査正答数(全国平均同等) ○市販テスト(85点以上の児童割合:80%以上) ○少人数を生かした形態・授業の工夫 ○3段階の交流活動を通して、友達と考えを伝え合い、学びを深める児童(教育活動評価:9.0%) ○実態把握と個別の指導計画・支援計画の見直しとそれらに即した指導(教師アンケート:90%) ○どの子にもわかりやすく、落ち着いて学習できる環境づくりと視覚的支援を取り入れた授業づくり(教師アンケート:90%) ○計画的な学級訪問(月1回以上)と評価 ○家庭学習アンケート「自分から進んで学習した(児童)」、「進んで取り組んでいた(保護者)」80%以上 ○玉川っ子検定の初回合格率 50%以上 ○4 T学習が定着している児童(教育活動評価:80%)(Target, Trial, Thinking, Training)	3	△個々の子供の学力分析した個人カルテを十分には活かせず、全国学力状況調査、標準学力検査等(国語、算数)においても、全国や県平均と比べ、上級生は同程度となっているが、下級生は平均以下となっている。 ○3段階の交流活動を設定するとともに、発問を精選して授業づくりを行ったことにより、子供たちは学びを深め、学んだことを自分の言葉でまとめることができる子供が増えてきた。 △個別の支援計画・指導計画の見直しを行ったが、その見直したものを実際に指導に生かすことが十分にはできなかった。 △4 T学習では、上学年の児童において自主的な漢字学習の習慣化が図られつつあるが、その他の内容については、自分の課題に応じて取り組む4 T学習が定着している児童は少ない。	A	・学校の評価は適切である。 ・学習のまとめとして、自分の言葉でまとめることができる児童が増えてきたことは評価できる。 ・授業参観して各学年とも集中し、発言もしっかりしており感心させられた。 ・下級生の学力については憂慮するところだが、先に理解できた子供が、まだ理解できていない子供に教えてあげるなど、玉川小学校ならではのよい環境もあるので今後に期待したい。 ・授業では、少人数でのよさを生かしたグループ学習などいい取組がされていると思う。 ・4 T学習は、目指している成果指標まで子供たちに定着していくよう頑張してほしい。	・上級生に対するきめ細かな指導を継続しつつ、低学年も実態に応じて、少人数授業や取り出し指導などを実施する。 ・交流そのものが目的化しないように、望ましい交流のモデルを教職員で共有し、発達段階に即して交流を通して学ぶ授業の在り方を追求する。 ・個別の支援計画・指導計画と一人一人の学力の実態を記した個人カルテをつなげて考え、その子に応じた指導について明らかにした上で取り組む。 ・4 T学習については、漢字学習だけでなく、自己の課題に応じてその他の内容にも取り組んでいけるよう、教師側からいろいろな取組例を示したり、子供たちの中からもいい取組例をモデルとして取り上げたりし、全体に広めて習慣化を図っていく。
	心の教育	○目指す姿をキーワード化した挨拶の取組・たまがわ挨拶の推進(M-HAT挨拶運動) ○友達よさに気づかせる学級経営 ○縦割り活動において主体的に活動できる場の設定と手立ての工夫 ○読書週間、読み聞かせ活動の実施 ○読書の日常化 ○教育活動全般を通してのボランティア活動の充実 ○認め合う活動や役割をやり遂げさせることによる自己肯定感・自己有用感の向上	○先生・友達・地域の方に気持ちよく挨拶する児童(教育活動評価:90%以上) ○クラス・異学年のいいところを見つけの実施(教師自己評価3以上(4段階評定尺度)) ○「たてわりで協力していますか」児童自己評価3以上(4段階評定尺度) ○「必読図書を読む」「進んで本を読んだ」児童自己評価3以上(4段階評定尺度) ○「おすすめの本紹介カード」の作成(毎月2枚以上作成の児童割合:80%以上) ○自分から進んでボランティア的行動ができる児童(教育活動評価:90%以上) ○「得意なこと自慢できることがある」「役に立っている」児童自己評価2以上(4段階評定尺度)	3	○中学校区共通の挨拶運動(M-HAT挨拶運動)で全校、保護者、地域を巻き込んだ挨拶運動に取り組むことができた。 ○縦割り会議をする場を設定し、各縦割りグループごとに生活に関するめあてを決めて取り組むことができた。 ○読み聞かせボランティアや教師(担任外)による読み聞かせ、読書タイムや読書週間等の取組により、読書に対しての関心が高まり、進んで本を読む児童が増えた。 ○ボランティアや認め合いにより、自尊感情の向上が見られる。	A	・学校の評価は適切である。 ・挨拶運動についてしっかり取り組んでおり、子供たちは、みんな挨拶ができています。 ・どこで会っても挨拶はよくしてくれるし、自分から大きい声で挨拶ができる子供が多く気持ちがいい。 ・縦割り活動もあり、子供たちは学年を超えて交流できている。 ・読書の習慣を付けることにより理解力、表現力の向上につながると思う。 ・子供たちがボランティア等を自ら企画して行い、互いを認め合い、自尊感情が向上していけば素晴らしいと思う。	・めざす挨拶の姿を明確に示した「たまがわ挨拶」の指導の一層の充実を図ることで、さらに子供たちの挨拶の意識を高めることができるようにする。 ・子供たちの自主的・実践的・自治的な態度や能力を育成するために、縦割り活動を充実させたり、役割を持たせた実践に取り組ませたりする。 ・読書旬間の工夫や読書ボランティアとの連携等を継続し、読書の習慣化と多様な読み物との出会いから読書活動の充実を図る。
	体力・健康の向上	○体育の授業時間の運動量の十分な確保 ○休み時間は、基本、毎日外遊びの奨励 ○柔軟性を高める準備運動(ストレッチ)の実施 ○業間運動の取組 ○年間計画に基づいた食育の充実	○1単位時間あたり30分以上の運動量の確保(教師自己評価:80%以上) ○1日30分以上の外遊びをしている児童(教育活動評価:80%以上) ○体力アップをめざした業間運動の実施(週1回以上)(教師自己評価:80%以上) ○地域の特色を生かした食育に関する年間計画の確実な実施(教師自己評価:90%以上) ○重点目標達成への意識向上「心を育てる」「たくましく健やかな体を育てる」「社会性を育てる」「学びをつなぐ力を育てる」(教師自己評価:80%以上) ○地域学習に意欲的に取り組む児童(児童自己評価:90%以上) ○M-HAT会議の充実と交流した内容の地域・各家庭への発信(教師自己評価3以上(4段階評定尺度))	3	△子どもたちへ外遊びを推奨する取組が不十分であり、年度後半になるにつれ、外遊びをする子どもが少なくなった。 ○1学期より業間運動(パワーアップタイム)において、毎週全校リレーなどの取組を行い、体力アップにつながった。業間運動がきっかけで、外で縄跳びをする子どもが増えた。 ○地域の協力のお陰で、全ての学年で地域の特色を生かした食育を推進することができ、食を通してふるさとを知り、ふるさとを愛する気持ちをもつ子どもたちが増えている。 ○M-HATの活動を通して、たて(小中の連携)と横(駒馬・天の原小との連携)の協力体制ができた。	A	・学校の評価は適切である。 ・休み時間の外遊びは、体力の向上だけでなく、コミュニケーション力の向上につながると思う。 ・家庭での外遊びがほとんど見られない。ぜひ、学校にいる時間は外遊びをして、体を動かす楽しさを知ることができよう先生方には頑張っていたきたい。 ・食を通してふるさとを愛する気持ちを持つ子供が増えたことはとても良いことだと思う。 ・地域行事に参加し、郷土を理解し愛する心を持たせるようにさらに取り組んでいきたい。	・体育科の授業において、体力の課題である柔軟性を高めるための準備運動の実施するとともに1単位時間に30分以上の運動量を確保し取り組む。また、業間運動や外遊びの奨励を通して体力向上を図る。 ・次年度の重点目標「自ら考え動く力の育成」の達成に向けて、学んだことを進んで実践し発信する力の伸長を図る。 ・宮原校区小中一貫教育共通の「ふるさと学習」を軸に実践し、体験活動を通して玉川の地域のよさを味わい、地域の自然・環境、文化財や地域行事等を大切に共する心、町おこしに貢献できる力を育む。
	信頼される学校	○重点目標を具体化した4つの実践と達成 ○地域の方を積極的にGTに活用し連携を深め、進んで関わる。 ○M-HAT(小中一貫教育推進校)との児童・職員の交流と中学校への円滑な接続	○重点目標達成への意識向上「心を育てる」「たくましく健やかな体を育てる」「社会性を育てる」「学びをつなぐ力を育てる」(教師自己評価:80%以上) ○地域学習に意欲的に取り組む児童(児童自己評価:90%以上) ○M-HAT会議の充実と交流した内容の地域・各家庭への発信(教師自己評価3以上(4段階評定尺度))	4	○いじめ防止アンケート等の毎月の実施、児童理解全体会での全職員で情報共有、それに伴ったいじめの早期対応により、早期解消に繋がった。 ○今年度、「メルシーポスト」を設置したことにより、日常的に自他のよさを認め合ったり、感謝の気持ちを伝えたりすることで思いやりの心を育むことができ、いじめの未然防止に繋がった。 ○「いじめ防止対策委員会」を実施しSSWやSCから適切な助言をいただき早期解消に生かされた。	A	・学校の評価は適切である。 ・いじめの早期発見、早期対応・解決は、子供の心の負担をいち早く軽くすることになるので継続的な見守りや声かけをする。 ・家庭と学校間の連携があり、情報共有ができてきている。 ・「メルシーポスト」の取組は、子供同士が感謝の気持ちを伝えたりする取組を進める。 ・いじめ対策委員会で、SSWやSCから専門的な助言をいただき、全職員の共通理解のもといじめがない学級づくりに取り組む。	
	いじめ防止	○つながりづくりを通した、よりよい人間関係の構築 ・未然防止 ・早期発見 ・早期対応	○SSTやSEL-8Sなど発達支持的生徒指導の実施 ○学校生活アンケート・いじめ防止アンケート等の実施・分析による早期発見・早期対応 ○アンケート後の確実な教育相談 ○「メルシーアーチ」「いいところ見つけ」の取組 ○「思いやり・親切」の取組 ○「いじめ防止」研修会の実施と心理・福祉・医療の専門家との連携	○心理教育プログラムの各学期2回の実施(教師自己評価:80%以上) ○学期毎のいじめに関する各種アンケートの実施と確実な対応(教育活動評価:100%) ○全児童対象の教育相談の実施(教育活動評価:100%) ○自分や友達のよさを見つけ、言語化できる児童(教育活動評価:90%以上) ○友達応援隊の取組の充実(教師自己評価:80%以上) ○「いじめ防止対策委員会」年3回の実施と各専門家との定期的・組織的な情報交換(教師自己評価3以上(4段階評定尺度))	4	○いじめ防止アンケート等の毎月の実施、児童理解全体会での全職員で情報共有、それに伴ったいじめの早期対応により、早期解消に繋がった。 ○今年度、「メルシーポスト」を設置したことにより、日常的に自他のよさを認め合ったり、感謝の気持ちを伝えたりすることで思いやりの心を育むことができ、いじめの未然防止に繋がった。 ○「いじめ防止対策委員会」を実施しSSWやSCから適切な助言をいただき早期解消に生かされた。	A	・学校の評価は適切である。 ・いじめの早期発見、早期対応・解決は、子供の心の負担をいち早く軽くすることになるので継続的な見守りや声かけをする。 ・家庭と学校間の連携があり、情報共有ができてきている。 ・「メルシーポスト」の取組は、子供同士が感謝の気持ちを伝えたりする取組を進める。 ・いじめ対策委員会で、SSWやSCから専門的な助言をいただき、全職員の共通理解のもといじめがない学級づくりに取り組む。
不登校防止	○つながりを生かした、来なくなる学校づくり ・未然防止 ・早期発見・早期対応 ・連携強化	○毎日の児童観察や家庭連絡による未然防止の徹底 ○欠席がちな児童に対する、早期対応の充実 ○地域、家庭、M-HATや教育相談室、関係機関との連携強化による不登校防止の取組	○全児童へ全職員による声かけ、不登校傾向児童の把握と組織的対応、保護者との連携(教師自己評価3以上(4段階評定尺度)) ○「福岡アクション3」の徹底した実践と欠席後の補習や声かけによる不安の解消(教育活動評価:100%) ○スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)、関係機関等の効果的な活用と連携(教師自己評価3以上(4段階評定尺度))	3	○少人数を生かして、全職員が他学年の児童にも温かな声かけを行ったことは、児童の不安解消や不登校の未然防止に繋がったと考える。 ○スクールソーシャルワーカー(SSW)を中心に、SC、児童相談所等と情報の共有を図り、連携して取り組むことで、不登校への早期対応に繋がった。	A	・学校の評価は適切である。 ・引き続き、少人数であることを生かして、児童との関わりを続けてほしい。 ・スクールソーシャルワーカー(SSW)を中心に情報の共有を図り、連携して取り組む姿勢が見えてよいと思う。	・福岡アクション3に基づいた実践を徹底して取り組むとともに、早期対応をして継続的な見守りや声かけと関係機関とつなぐ校内システムを明確にして改善を図る。 ・学校と家庭、関係機関(SSW、SC、児童民生委員など)との連携を図り継続して取り組んでいく。
働き方改革	○働き方改革を推進した教育の質の向上	○定時退校日の実施 毎週金曜日 ○退校時刻の自己申告の実施による超過勤務の縮小 ○業務改善推進委員会の実施	○月間時間外勤務総時間の減少(前年比5%減) ○退校時刻目標の達成(職員自己評価:達成率80%) ○月1回の業務改善委員会実施によるPDCAでの業務の見直し【続けること・やめること・改善すること】(月1回の実施100%)	3	○各月の時間外勤務時間が前年度比5%以上の減少となる月が多かった。 ○毎月、業務改善委員会を実施し、教職員で共通理解を図って取り組んできたことで、徐々に超過勤務時間削減の意識が高まってきている。	A	・学校の評価は適切である。 ・超過勤務時間の削減の意識の高まりは、今一層の努力をお願いしたい。 ・今後、ペーパーレスによる効率化がもっと進むことを望む。	・来年度も業務改善推進委員会を定期的に実施し、業務の効率化や改善策について話し合う。 ・職員各自が超過勤務削減の意識をもって定時退校の日時を設定して取り組む。

◇ 評価について

・【自己評価】	4: 目標達成(90%以上)	3: ほぼ達成(70%~90%)	2: もう少し(60%~70%)	1: できていない(60%未満)
・【学校関係者評価】	A: 自己評価は適切である	B: 自己評価は上方修正すべきである	C: 自己評価は下方修正すべきである	